

やどかりの里とヴィレッジの交流を通して

相互研修，相互研鑽を目指して

谷中 輝雄（やどかりの里理事長）

ケースマネジメントを学ぶための渡米

「ケースマネジメントやケースマネージャーの養成についてアメリカに学びに行きませんか」と、野中猛医師（埼玉県精神保健総合センター）に声をかけられたのが1995年の夏のことだった。そしてそれがアメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルス郡ロングビーチ市にある「ヴィレッジ」(The Village Integrated Services Agency)との出会いだった。「ヴィレッジ」は1つのプロジェクトで精神障害者の社会復帰施設である。

野中先生とはケースマネジメントの研究会を一緒に主催していたこともあり、そのことが1つのきっかけとなり、「ヴィレッジ」を中心にケースマネジメントの実際について視察に出掛けることになった。

ヴィレッジとやどかりの里の共通点

「ヴィレッジ」で説明を受けて、まず驚かされたことは、「ケースマネジメント」とは呼ばないということであった。「ケース」として扱うのは失礼だというのである。「マネジメント」という言葉も専門家による一方的な方法に受けとめられがちなので「パーソナルコーディネーター」と呼んでいるということであった。出鼻を挫かれるというのは正にこのことだと思わされた。

しかし、この「パーソナルコーディネーター」は当事者の自己決定を尊重し、生活上のコーチとしての役割を持つと語られた。私は思わず「やどかりの里」の活動と比較しつつ聞いた。もはやケースマネジメントを学ぼうという気持ちはどこかに飛んでいた。